所見及「レ」線寫眞により手術の必要を認め第一例は右上顎竇鑿開術、第二例は右上顎竇根治手術及篩骨蜂窠開放術、第三、四、五例は篩骨蜂窠鼻外手術を施行したるに孰れも術後經過良好にして、視力佳良となり眼球突出度は兩側の差殆ど消失又は減少し、その他の鼻及眼症狀も亦消失又は輕減したり。5例中4例は炎症によるもの、1例は「ムコツェーレ」によりたるものなりき。(今西抄)

急性扁桃腺炎敗血症の横隔膜下轉移膿瘍

湯淺　浩一

耳鼻咽喉科　12卷　2號　119頁

24歳の男、4日前より風邪氣味なりしが翌日39°C の發熱を來し咽頭痛及び嚥下痛を訴ふ。急性扁桃腺炎にて上窩に膿を認む。起炎菌は溶血性連鎖狀球菌及び雙球菌なり。入院後「パンセプチン」0.5cc 扁桃腺實質内注射及び「テラポール」の筋肉内注射を行ひ3日目には自、他覺的共良好となれり。然るに4日目に至り惡寒戰慄を以て 36.5°～41°Cの弛張熱を示せり。白血球數は入院時8800なりしも7600に減少せり、X線寫眞にては胸部に著變なし。2週間後のX線寫眞は胸部に著變なきも右側横隔膜陰影著しく上昇せり。間もなく右胸部第七肋骨の高さにて横に楕圓形 (9×4cm) の腫脹及び壓痛著明となる。黄疸の兆なきも頑固なる吃逆あり。故に横隔膜下轉移膿瘍を疑ひ試驗穿刺を行ひしに黄綠色惡臭ある膿を得たるを以て切開を加へ多量の排膿を見る。一時狀態可良となりしも4週の終りには呼吸困難のため躁暴狀を呈し、視力障碍あり、口蓋粘膜下出血、胸腹部皮膚の散在性出血斑を示し、輸血續行の甲斐もなく入院32日目に遂に鬼籍に入れり。尙再三の血液培養は菌陰性に終れり。(渡部抄)

手術後精神病に就て

向笠　　潛

耳鼻咽喉科　12卷　2號　139頁

26歳男子職工。精神病的遺傳認めず。性質は無口、交際狹き方なり。鼻中隔彎曲匡整手術施行後8日目、輕度の頭痛、不眠を訴へ、翌日不眠、言語錯亂、興奮、拒絶症、緘默症等の精神症狀現はれ、家人に精神科受診を勸告し翌日退院せしめたり。

本例は早發性痴呆の病前性格を有せしものに手術が誘因となり急に緊張性興奮發作の起りたるものならん。(小谷抄)

鼻涙管閉塞の鼻内手術法

松井　太郎

耳鼻咽喉科　12卷　3號　238頁

27歳女、右鼻根部瘻孔、涙漏あり。患者は17歳の時涙嚢疾患にて切開手術をうけ、本年5月更に涙嚢摘出術を受けたり。本例の鼻涙管は下方にて閉塞し上部は擴張す。鼻外より涙嚢摘出を行はれたるが鼻腔との交通を缺きたる爲瘻孔を殘せるものなり。ヴェストの法に從ひ鼻内より擴張せる鼻涙管を開放し、粘膜を開き一部を除去し廣き交通路を作れり。翌日は既に外部の瘻孔より分泌なく、1週にて全治退院せり。更に著者はヴェスト手術法につき述べたり。(藤田抄)

赤血球沈降速度反應に現はれた副鼻腔蓄膿症手術の影響

維田　哲夫
東海林　信

耳鼻咽喉科　12卷　3號

著者は副鼻腔蓄膿症手術例50につきウェスターグレン氏法に依る赤沈反應を行ひ、其際室溫20°C～30°C、測定時間は1時間2時間とす。採血の標準は術前、術後第1、4、7日とし之れより 5～10日の間隔を置き術前値に復するまで連續行ふ。成績、1、無熱時の上顎竇並篩骨蜂窠蓄膿症手術に於て術後最高値 15～35 のもの最多く、40以上は全身的抵抗減弱者、60以上は輕度の誘發疾患を疑ひ、80以上は多くは誘發疾患を認む。2、術後4日前後に最高値に達し、恢復に要する日時は術後約10日。3、初回と次回手術との比較は殆んど後者が促進高度なり。即次回手術には未だ初回手術の影響の殘存せるを示す 4、赤沈曲線と體溫曲線との關係は必らずしも